

欠損駆動思考 — 概要版

棄却される誤差を、問いとして拾う

2026 年 02 月 06 日

目次

1	欠損駆動思考——「欠け」を手放さない、という態度	2
1.1	違和感を捨てないでください	2
1.2	「欠け」という見方	2
1.3	なぜ「待つ」ことが難しいのか	2
1.4	体が教えてくれること	3
1.5	待てる力を育てるもの	3
1.6	創造のプロセス	3
1.7	最後に	4

1 欠損駆動思考——「欠け」を手放さない、という態度

1.1 違和感を捨てないでください

「なんか引っかかる」「もやもやする」「言葉にならないけど、何か違う」

そういう感覚を、すぐに消そうとしていませんか？

私たちは毎日、無数の「ズレ」を感じています。予想と現実の間に生まれる、小さなギャップ。多くの場合、脳はそれを自動的に処理し、なかったことにします。効率的に生きるために。

でも、そのズレの中に、大切な何かが隠れていることがあります。

1.2 「欠け」という見方

本論では、この「ズレ」を特別な視点で捉えます。

欠損とは、予想と現実のズレを、意識が「欠け」として感じた経験のことです。

「何か足りない」「しっくりこない」「これじゃない」——そういう感覚は、単なるノイズではなく、問いの種かもしれません。

欠損駆動思考とは、この「欠け」を捨てずに、問いとして持ち続ける態度です。

1.3 なぜ「待つ」ことが難しいのか

問題を見つけたら、すぐに解きたくするのが人間です。不快な状態を早く解消したい。答えを出して安心したい。

でも、すぐに解こうとすると、問題を小さく切り詰めてしまうことがあります。

本当は「A、B、Cすべてが関係している複雑な状況」なのに、「Aだけの問題」として解いてしまう。そうすると、B、Cは見えなくなります。

待つということは、「まだ見えていないものがあるかもしれない」と、問いを開いたままにしておくことです。

1.4 体が教えてくれること

違和感は、頭だけで感じるものではありません。胸がざわつく。お腹が重い。肩に力が入る。

体が何かを教えようとしています。

体が感じていることに耳を傾ける——これも欠損駆動思考の大切な要素です。

言葉にならない段階から、体は「何かが違う」と知らせています。その声を聴くことが、創造の入口になることがあります。

1.5 待てる力を育てるもの

「待つ」には、支えが要ります。

ただし、その支えは物理的に隣にいる必要はありません。

心の中に「信頼できる誰か」がいること。それは今は会えない人でも、亡くなった人でも、小さい頃のお母さんの記憶でも構いません。

安定した関係の経験が、内面に残っている。その「内なる安全基地」が、待てる力を支えています。

チームで言えば、心理的安全性がこれにあたります。「失敗しても大丈夫」「変なことを言っても受け止めてもらえる」——そういう場があるから、答えを急がずに済むのです。

1.6 創造のプロセス

欠損駆動思考では、創造は次の5つの段階を経ると考えます：

段階	名前	何が起きるか
1	場	違和感を感じる場に身を置く
2	波	内面に揺らぎが生まれる
3	縁	異質なものと出会い、留まる
4	渦	新しいパターンが立ち上がる
5	束	形にまとめ、表現する

大切なのは、**3段階目「縁」**に留まることです。

「これは違う」と思ったものに、もう少しだけ向き合ってみる。すぐに判断を下さず、異質さの中に身を置く。

そこで何かが生まれることがあります。

1.7 最後に

欠損駆動思考は、効率を否定しません。「すぐに解ける問題は、すぐに解いていい」のです。

でも、本当に大切な問題——人生の転機、創造的な仕事、深い人間関係——では、「待つ」ことが必要になることがあります。

その時に思い出してください。

「誤差を捨てるな」「すぐに解くな」「身体で問え」

そして、

「ひとりでは待てない。でも、心の中に誰かがいれば、待てる」

あなたの「欠け」は何ですか？ その違和感の中に、何が隠れていますか？